

高田保馬の少子化論に学ぶ

Learn from Takata Yasuma's theory on low birthrates

赤川 学 (東京大学)

Manabu AKAGAWA (University of Tokyo)

akagawa@l.u-tokyo.ac.jp

1. 研究の目的

現代の少子化（低出生率）を論じるときには、何人も否定し難い、以下の4つの事実があると思われる。

- (1) 1人あたり GDP の高い豊かな国は、出生率が低い。
- (2) 日本やアジアの大都市圏は、農山村や村落部に比べて出生率が低い。
- (3) 世帯収入の低い女性の子ども数が多い。「貧乏人の子沢山」
- (4) 歴史的には、豊かな階層の子ども数が多い。「金持ちの子沢山」。

これらの事実を説明するには、既存の少子化に関する説明を批判的に再検討する必要がある。本報告は、日本社会学の巨人というべき高田保馬がほぼ 100 年前に提出した少子化論を、上記の事実を説明する有望な学説として提示するとともに、人口学の観点から、彼の理論がどのように評価できるか議論したい。

2. 研究の方法

エスピン＝アンデルセンの福祉国家レジーム論、エマニュエル・トッドの家族構造論、グレゴリー・クラークの歴史人口学などによる低出生率の説明を批判的に再検討する。いずれも上記の3傾向を説明するには物足りないことが確認される。またピエール・ブルデューの「中産階級・低出生説」や、ゲイリー・ベッカーの家政経済学的説明には、理論的洗練が必要であることを確認する。

その上で高田保馬の少子化論を、現代的な社会学の概念を用いて再構成し、上記の理論群との比較優位を有していることを確認した上で、この理論が現代日本の少子化対策や社会政策に与える理論的インパクトを議論したい。

3. 結果

高田は、西欧諸国の貧富による出生率の差異は大部分が人為的出生制限によっており、その原因は「力の欲望」、すなわち「自己の優勝と其の優勝の誇示を欲する欲望」にあると

する（高田 1918）。それは(1)自己の栄達向上を計るためその障碍たる産児数を制限する、(2)産児になるべくよい生活条件を与えて社会の高地位に上らせるために、産児数を制限する欲望である。知識階級は「力の欲望」に従い、一定の生活標準における福利を求めるがゆえに、産児数を調節することになる。

ここで「生活標準」（生活期待水準）と「富」（実際の生活水準）の関係が問題となる。生活標準が一定なら、社会の豊かさは出生率を高める。しかし力の欲望により生活標準が変化するため、いくら福利が増進しても、その速度よりも早く生活標準が高まると出生率は減少する。すなわち社会のなかで最上位に属する階級では、富が生活標準を上回るので、出生制限は起きない（富者の子沢山）。また最下位に属する階級では、そもそも生活標準が低いので、出生制限は起きない（貧乏人の子沢山）。しかし上位と中位に属する階級では、富の増進以上に生活標準が高まるので、出生制限が行われ、出生率が低下する。

高田はこのように、豊かな社会においては、力の欲望によって昂進される生活期待水準が、実際の生活水準以上に上昇するからこそ、少子化が発生するとみていた。高田はこの議論を民族周流理論、国民皆貧論に接続させていくのだが、本報告ではむしろ最初に述べた4つの事実を説明するのに最有望の理論として評価したい。

4. 結論

このように、単なる物質的豊かさではなく、「力の欲望」が増進させる生活標準（生活期待水準）の高まりが小子化につながるという社会学的ロジックは、現在日本における低出生の現実の多くを説明しうる。たとえば赤川(2018)で示したような、日本や韓国・台湾など東アジア諸国において（学歴の）女性下方婚が少ないという事実や、1990年から2015年の間で、合計特殊出生率とジニ係数(18歳から65歳)が同時に判明する42ヶ国に関して、ジニ係数が高くなると翌年の出生率も高くなるという傾向についても、高田保馬の少子化論に基いて解釈可能と思われる。

他方、生活期待水準の高まりをどのように定量的に測定するか、あるいは、高田の少子化論を、他の説明（経済学的、家政学的なそれ）との差別化を図るためにどのような彫琢が必要になるか、いくつかの課題についても議論したいと考えている。

文献

赤川 学, 『これが答えだ！少子化問題』, 2017, 筑摩書房.

赤川 学, 『少子化問題の社会学』, 2018, 弘文堂.

高田保馬, 『社会学的研究』1918, 東京寶文館.